

82. 琉球舞踊と綾子舞

－芸態比較対照研究による古歌舞伎踊の系譜考、琉舞と小歌踊系 民俗芸能の民族芸術学的考察

文化学園大学文化ファッション研究機構共同研究員

児玉 絵里子

概要

従来、主に歴史的観点から初期歌舞伎踊の系譜を考察した日本芸能史研究において、実体験を伴う「型」の理解と芸態研究は、未だまとまった考察が無く長年の課題として残されてきた。本研究は、琉球舞踊と綾子舞を実際に稽古する申請者が、自らの舞踊体験と美術史研究から得た「芸態の比較対照研究」という独自の方法を駆使し、琉球舞踊と初期歌舞伎踊の系譜について、舞踊体験を通じて明らかにした仮説—すなわち、綾子舞と沖縄の宮廷舞踊とが初期歌舞伎踊に由来するという仮説を、実証しようと試みるものである。

本研究により、従来、本田安次により漠然と関連が指摘されていた琉球舞踊（国指定重要無形文化財）と「綾子舞」（国指定重要無形民俗文化財、※以下国指定）の関係性について、特に、老人踊「かぎやで風」、若衆踊「若衆特牛節」や二才踊「上り口説」などの演目が綾子舞の小歌踊と一致して古歌舞伎踊の系譜にあると具体的に実証できた。また、以下の新知見が明らかとなった。同小歌踊に振りの一致する「宜野座の児太郎」（選択無形民俗文化財、※以下国選定）は、綾子舞の囃子舞と足の運びが類似する。琉球舞踊と「徳山の盆踊」（国指定）、「阿万の風流大踊小踊」（国指定）、「阪本踊」（国選定）、「古座（熊野地域）の扇踊り」、「対馬の盆踊（特に、対馬巖原の盆踊）」（国選定）ほか国内民俗芸能の型に、興味深い一致を見出すことができる。すなわち、沖縄に伝わる琉球芸能を軸として国内民俗芸能の芸態を比較対照することで、古歌舞伎踊の型がおぼろげながら浮かび上がるのである。一方で、初期歌舞伎踊に系譜する綾子舞は「秋保の田植踊」（国指定）と芸態が類似し、土地の特性という民族芸術的特質を型の構成に見出せるのである。また、絵画史研究・染織研究においても重要な新知見が見いだされた。すなわち、「舞踊図屏風」（重要文化財、京都市）ほか江戸時代前期に数多く制作された一人立美人図「舞踊図」は、「型」を決める踊り手の姿を鑑賞する意図のもと制作された可能性がある。芸態（型）の相関性が見いだせる民俗芸能の踊衣裳は、琉球紅型の踊衣裳における図柄の生成過程に重要な示唆を与える。

今後、本研究により明らかとなった次の課題、すなわち、八重山舞踊勤王流ほか王国時代琉球舞踊の古式が遺る八重山地方の芸能採取を中心に、国内民俗芸能と琉球舞踊の芸態比較対照研究をさらに進めて参りたい。本研究は、三菱財団からの助成なしには行うことが不可能であった。ご支援は助成者の強い励みと支えとなり、本助成が可能にした現地調査は、伝承活動に直接触れるかけがえのない体験となった。心より感謝を申し上げます。

背景および目的

本研究は、自らの舞踊体験と美術史研究を通じて得られた「芸態の比較対照研究」という独自の方法を駆使し、琉球舞踊と初期歌舞伎踊の系譜について、綾子舞と「沖縄の宮廷舞踊」（琉球舞踊）とが初期歌舞伎踊に由来するという仮説を、実証しようと試みるものである。

本研究は、従来、本田安次らによって漠然と指摘されてきた綾子舞（新潟県柏崎市）と琉球舞踊との関係性に対し、2015年、自らの舞踊体験からその具体的な芸態の「型」の共通点を見出したことに始まる。（学会発表「綾子舞と琉球舞踊——芸態比較研究による小歌踊と二才踊・若衆踊」2017年12月2日民俗芸能学会椎葉大会 於：

宮崎県 椎葉村開発センター 《①発表要旨『平成 29 年度民俗芸能学会椎葉大会 大会プログラム・研究発表要旨』 p.3 ②発表概要『民俗芸能学会会報 第 99 号』 p.4)

本研究に着手した経緯と研究方法は次の通りである。本研究者は東京都出身だが沖縄県に長く在住し、(一財)沖縄美ら島財団(旧 財団法人海洋博覧会記念公園管理財団)学芸員などとして沖縄研究に取り組み、琉球舞踊の稽古に通った。その後、ドナルド・キーン・センター柏崎 学芸員として新潟県柏崎市に居住し、柏崎市主催の綾子舞伝承者養成講座で下野保存会(会長 関一重)から小歌踊の指導を受けた。これら舞踊体験を通じて綾子舞と琉球舞踊における具体的共通性を体験・確認し、研究に着手した。

綾子舞(国指定)は、小歌踊と囃子舞、狂言からなり、初期歌舞伎踊の面影を残すとして高く評価される民俗芸能である。かつては新潟県柏崎市女谷の複数地域が伝えたが、現在は下野と高原田に残る。本田安次は、綾子舞の小歌踊が組歌形式を成す点で「沖縄の宮廷舞踊」と共通すると指摘した。本田によれば、「綾子舞は、…慶長、元和のころ流行した洗練された小歌踊、すなわち古歌舞伎踊の面影を最もよく伝えている」(本田『図録 日本の民俗芸能』p.23)。沖縄の宮廷舞踊を組踊と端踊の大別 2 種と捉えた本田は、端踊について「古歌舞伎風な小歌踊」(『本田安次著作集～日本の伝統芸能 第十巻 風流 I』p.603)と指摘した。だが、本田の指摘の後、綾子舞と琉球芸能の具体的関係を明らかにする研究は行われていない。

本田や従来の研究者が取り組んできた芸態研究は、主に歴史的観点から芸能の系譜を解き明かし、芸能の発生と展開を考察したものである。林屋辰三郎をはじめ先学諸氏による歌舞伎研究、芸能史研究において、「芸態」の重要性は漠然と指摘され、芸態を偲ばす画証として屏風絵などの絵画資料が多く取り上げられたものの、しかし、そこでの「芸態」とは舞台あるいは劇自体の構造論が主なもので、芸態を構成する「型」そのものへの言及や指摘は行われず、すなわち、古歌舞伎踊の演目を具体的に形作る型の内容を問う考察は、芸能史研究においてながく看過されてきたのである。

例えば次のような記述である。「お国歌舞伎の芸態を、ごく簡単に述べておこう。舞台および楽器(笛・大小鼓・太鼓)は先駆の猿楽の形式をそのまま襲って用いたとされている。それは正しいが、いま少し厳密ないい方をすれば、歌舞伎は狂言の、それも囃子方を伴う舞狂言の舞台・楽器を襲用したというべきである。」(服部幸雄「歌舞伎―構造の形成」p.16)。しかし一方で、型の認識につながる次のような発言もあった。「会場に見えていた折口信夫先生が『昔の歌舞伎踊りにそっくりで、もしかしたら本田が創作したもの(を踊っている)ではないか』と驚いた、というエピソードも残っています。」(須藤武子「富治さんの時代」『重要無形文化財国指定 40 周年記念誌 綾子舞』p.25)

「舞」と「踊り」の根源的特質と関係性に着目しその生成過程を説いた三隅治雄の研究においても、芸態とはすなわち、「型」というよりもむしろ芸能の本質を明らかにしようとして用いられた概念であった。小寺融吉に始まり、本田や郡司正勝らが主導した日本芸能史における芸態研究は、後に、日本民俗芸能協会を拠点とした各地の民俗芸能における個別の芸態記録という成果を生んだが(文化庁助成『民俗芸能現地習得報告書』日本民俗芸能協会発行)、しかし、沖縄の芸能における芸態記録は看過され(ただし、沖縄では別個に行われてきた)、また、国内芸能における総合的な比較対照研究は課題として残されてきた。これに対し、本研究は芸能史研究に於いて初めて、沖縄を含む総合的、かつ具体的な、芸態の比較対照研究をまとまって行うものである。

本研究の重要性は、第一に、舞踊体験を通じた芸態研究、および、図像学を基礎とした美術史研究の手法を土台とする芸態比較対照研究、という新たな研究の観点にある。従来、古歌舞伎踊の芸態は、重文「歌舞伎図巻」(徳川美術館、江戸時代 17 世紀)と重文「紙本着色歌舞伎草紙」(徳川美術館、安土桃山～江戸)の絵画表現、そして、舞踊全体の所作を以て漠然と捉えられてきた。芸態比較研究により古歌舞伎踊の実像を具体的に明かし、琉球舞踊と綾子舞との比較対照を行うことで、各々の芸能の系譜と特質が明らかとなるはずである。また、本研究では、芸態比較研究を推し進め、琉球舞踊の芸態と綾子舞小歌踊の他の演目、及び、日本国内に伝承される小歌踊系の民俗芸能とを比較対照する。具体的に琉球舞踊における「古典舞踊」(宮廷舞踊)の成立を考察し、さらに芸能史、美術史、民俗学、思想史の関連の中から、琉球舞踊と綾子舞、小歌踊系民俗芸能の特質を、地域的特性、すなわち民族芸術学的観点から明らかにしようと試みる。本助成により、芸態比較研究の基礎的方法論を確立し、琉球舞踊と綾子舞に関する新知見を見出すとともに、新たな芸能研究の糸口としたい。

方法

上記目的のためには、芸態および芸能の「型」を確認できる映像資料により、各地の芸態（型）の比較と分析、精査を行わねばならない。しかし、芸態比較対照研究で必要となる、各地の民俗芸能、あるいは琉球舞踊を撮影した映像の公開もしくは作成は、現時点において極めて限られた範囲にとどまっている。それは、次のような背景による。

まず、沖縄を含む各地の芸能において、芸、すなわち芸態とは、もともと、多くの地域で長男にのみ秘伝されたなどという門外不出の宝、門外不出の舞踊譜などという扱いを受けた歴史的経緯がある。例えば、綾子舞を今日に受け継ぐ下野と高原田も、近年まで稽古場を互いに公開しないなど厳しい環境を保ってきた。また、個別の舞踊家が国指定重要無形文化財保持者の認定を受ける沖縄の琉球舞踊界では、芸態(型)とは各流会派の根本である。従って、少なくとも流会派に所属しないかぎり、映像に関する情報を得ることさえできない。こうした理由から、国内各地の民俗芸能のうち公的に記録映像の公開を行っている地域であっても、多くは、一部の演目、もしくは、演目の一部を紹介するにとどまり、さらにそれらの情報も、現地で直接、関係者の方からご指導ご教示をいただかない限り、ほとんど知り得ないのが現状である。

そのため、助成者はまず、従来の研究において古歌舞伎踊、あるいは、風流踊などとの関連を少しでも指摘された複数個所の民俗芸能について、実際に、祭りの時期等に現地を訪れ、保存団体等の協力を得つつ映像撮影や資料収集等を行った。また、助成者は、研究とは別に、沖縄在住時から琉舞道場に通っており、本調査において、師の格別のご支援を受け舞踊稽古を継続した。

一方、こうした現地調査のほか、芸態の分析対象として、現行の能や歌舞伎などの伝統芸能、江戸時代の風俗画・遊楽図等の絵画資料も考察の対象とした。特に、舞台芸術として商業化が進む能や歌舞伎は、販売される一部演目のDVDを除き映像を入手できないという困難がある。従って、その芸態比較対照研究は、各地の民俗芸能と同じく、できる限り実際に舞台に足を運び、可能な範囲での比較対照を試みた。

なお、今回の助成研究において、各地の保存会、および関係者の方々から、格別のご指導ご支援を賜りました。記して御礼を申し上げますとともに、その詳細と御芳名については詳しい調査報告と併せ、別稿にて、あらためて明記公表させていただく予定です。

一資料【現地等調査対象一覧】（敬称略。含む公演・展覧会）一

«[]は伝承所在地または調査地 【お詫び】 下記御芳名は本調査にご協力いただきました方々の一部です。»

※役職名は調査時(2018~2019年)のものです。◎→国指定重要無形民俗文化財、○→選択無形民俗文化財(「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」)、◇→ユネスコ無形文化遺産、(県)→県指定無形民俗文化財、(市)→市指定無形民俗文化財

【琉球舞踊指導】宮城幸子（国指定重要無形文化財「琉球舞踊」総合認定保持者、故・真境名佳子に師事、真踊流代表、真踊流佳幸の会会主）、宮城りつ子（国指定重要無形文化財「琉球舞踊」伝承者、真踊流佳幸の会教師）
／於：琉球舞踊真踊流 宮城幸子道場[沖縄県那覇市]

□ ◎西馬音内の盆踊 [秋田県]

□ ◎鬼剣舞 [岩手県]

□ ◎◇秋保の田植踊（馬場・長袋・湯元）[岩手県、仙台市教育委員会 斉藤健一、馬場の田植踊保存会会長 佐藤信明、長袋の田植踊保存会会長 沼田孝]

□ 仙台の芸能（大沢の田植踊(県)、上谷刈の鹿踊剣舞(市)、榊流青麻神楽(市)、生出森八幡神楽(市)、◎雄勝法印神楽、◎早池峰岳神楽、川前の鹿踊剣舞(市)／於 仙台市歴史民俗資料館開館40周年記念「れきみん秋祭り2019」)

□ ○大崎八幡の能神楽 [大崎八幡神社能神楽保存会]

□ ◎小河内の鹿島踊 [東京都小河内、保存会会長 吉野榮喜、前会長 吉野栄]

□ ◎下平井の鳳凰の舞 [西多摩郡日の出町、保存会代表 清水武司]

- ◎新島の大踊（若郷・本村）[東京都新島村、新島村博物館、新島村博物館係長 宮川祐、保存会会長 植松正光、保存会副会長 前田勝利]
- ◎チャッキラコ [神奈川県三浦市、保存会会長 木村信英]
- ◎綾子舞 [新潟県柏崎市(下野・高原田)、保存振興会・後援会事務長 小池一弘、(株)植木組取締役 松原眞之介]
- ◎根知山寺の延年 [新潟県糸魚川市、糸魚川市教育委員会、糸魚川市長 米田徹、糸魚川市総務部 久保田浩之、同教育委員会文化振興課課長補佐 木島勉、氏子総代 伊藤眞一、奴奈川神社宮司 榊守夫、伊藤博夫]
- ◎徳山の盆踊・徳山神楽 [静岡県川根本町、川根本町教育委員会、徳山区長 青木良行、静岡県神社庁榛原支部事務局長 山下忠之、保存会事務長 上野信吾、中谷京司、川根本町教育委員会 課長 平松敏浩、同主幹 中村慎、同主査 鈴木裕麻]
- ○篠原踊・○坂本踊・惣谷狂言 [奈良県五條市、奈良県地域振興部 森本仙介、奈良県立民俗博物館学芸課長 横山浩子、五條市文化財課 山本望実、吉崎正、吉崎ミチコ、波多宏樹、西本八千代、奈良県教育委員会、奈良県立民俗博物館、市立五條文化博物館]
- ◎阿万の風流大踊小踊 [兵庫県南あわじ市、保存会会長 森川勝次、大西康智、亀岡八幡宮宮司 前川眞澄、岸上友龍、里口寿信、楠木有三]
- ◎綾子踊 [香川県仲多度郡まんのう町長 栗田隆義、まんのう町教育委員会生涯学習課課長 松下伸重、同文化財室主査 加納裕之、保存会会長 白川正樹]
- 阿波踊り [徳島県／豊島区役所（東京都）]
- ○対馬の盆踊 [長崎県対馬市、対馬市教育委員会]
- ○宜野座の京太郎(宜野座の八月あしび) [沖縄県宜野座村、宜野座村立博物館、宜野座区長 島袋全永、宜野座村立博物館 山川須真子学芸員、屋良宣廣]
- 竹富町の芸能(◎竹富島の種子取) [沖縄県八重山郡竹富町]
- ◎西表島の節祭（祖納・干立） [沖縄県八重山郡竹富町、那根昂、祖納公民館長 那良伊孫一]

【展示等】

- ❖熊野地域の芸能 [2018 年度企画展「熊野地域の扇踊りと古座獅子」於 和歌山大学附属図書館・紀州経済史文化史研究所、紀州経済史文化研究所・特任准教授 吉村旭輝]
- ❖香川・瀬戸内の芸能 [展覧会「祭礼百態—香川・瀬戸内の風流—」於 香川県立ミュージアム]
- ❖展覧会「サントリー芸術財団 50 周年記念 遊びの流儀—遊楽図の系譜—」於 サントリー美術館
- ❖日本民俗芸能協会 西角井正大会長、花柳園喜輔 副会長（※助成者は、同協会総務補助を担う同協会会員。）

■琉球舞踊写真 舞踊指導:宮城能鳳(国指定重要無形文化財「組踊立方」保持者/人間国宝、国指定重要無形文化財「琉球舞踊」総合認定保持者、文化功労者)

結果および考察

調査分析の結果、以下の点を明らかにした。

- 1) 琉球舞踊と綾子舞にみる古歌舞伎踊の系譜—若衆踊「若衆特牛節」・二才踊「上り口説」と綾子舞の小歌踊
綾子舞の小歌踊「小原木踊」（下野）・「恋の踊り」（下野）・「常陸踊」（高原田）と、琉球舞踊「古典舞踊」の若衆踊「若衆特牛節」二才踊「上り口説」の芸態、すなわち「型」が一致するという新知見は、琉球舞踊が古歌舞伎踊の流れにあることを裏付ける。
従来の琉球舞踊研究で、「二才踊」は他の琉舞の演目に比べ、大和芸能の影響を強く受けて成立したと指摘されてきた。なかでも「上り口説」の歌詞は琉歌本来の形体ではなく、屋嘉比朝奇（1716～1775/琉球王国時代 尚敬 24 年～尚穆 4 年）により大和流、すなわち七五調の形式が取り入れられた新形体の歌曲である。これをふまえ、その芸態（型）を比較対照した結果、綾子舞と「上り口説」は特徴的、かつ舞踊の要を成す型、すなわち扇の動作や振りが数多く一致し、さらに、その一致や類似は、二才踊「上り口説」に比べ、若衆踊「若衆特牛節」

により多く見出せること、従って、「若衆特牛節」、「上り口説」が直接的に日本の芸能、すなわち古歌舞伎踊の系譜に在り、古歌舞伎踊に由来してその形式を色濃く残した舞踊だという可能性が明らかになった。そして、「若衆特牛節」が「上り口説」に先立って成立した可能性がある。この結論は本田安次の指摘に矛盾せず、本実証研究により、本田安次らの漠然とした指摘が正しいと明らかになった。

2) 古歌舞伎踊の具体的説明

日本各地の小歌踊系芸能の芸態比較対照研究は、琉球舞踊の成立を特定し、さらには、初期歌舞伎踊の実態、芸能としての歌舞伎踊の系譜と伝播を明らかにするものと考えられる。すなわち、次のとおりである。

・型の分類と系譜

従来の研究では、「歌舞伎踊はもと小歌踊の洗練された形のもので、かぶいた（引用元は「かぶいた」に傍点あり）小歌をうたいながら、それに合わせて妖艶な踊を踊りました。」（本田安次『日本の伝統芸能』p.200）などと漠然と記述されてきた。「芸態」の指摘とは、例えば「集団で踊る」などという集団の構成や編成の指摘にとどまるもので、具体的に「古歌舞伎踊」がいかなる芸態、すなわち「型」から構成されるかは明らかとされず、漠然とした概念的理解によった。同時にまた、風流や小歌踊、古歌舞伎踊などとして指摘される各地の芸能の共通点も、具体的には指摘されていない。

ではその芸態、型はいかなるものであったのか。この問題に対し、本研究で、日本各地の小歌踊系あるいは古歌舞伎踊の流れを汲むと指摘された複数の民俗芸能について、現地で詳細に調査を行い記録化した結果、次の新知見が明らかとなった。すなわち、各地の小歌踊系・古歌舞伎踊の流れを汲むとされた芸能のうち、特に、琉球舞踊「若衆特牛節」「かぎやで風」「上り口説」が、日本各地で伝承された芸能の芸態との一致、共通性を示している。しかし一方で、各地に伝承された民俗芸能の芸態を比較しても、型の共通性は見出しにくい。つまり、本研究が見出した手法—沖縄に伝わる琉球舞踊（琉球芸能）を軸として比較対照研究を行うという研究の観点によって、「古歌舞伎踊」の「型」がおぼろげながら浮かび上がってくるのである。なお、「若衆特牛節」と「かぎやで風」は今日においても祝儀舞踊と位置付けられ、その成立年代は琉球王国時代「御冠船踊」にさかのぼる。冊封使を歓待するために琉球国王が首里城に設けた宴の場で演じられた演目である。

沖縄の宮廷舞踊（琉球芸能「古典舞踊」。※廃藩置県後の創作となる「雑踊」や現代の「創作舞踊」を除く）と共通した型を示す芸能は、具体的には「綾子舞」（国指定／新潟県）のほか、「秋保の田植踊」（国指定／岩手県）、「徳山の盆踊」（国指定／静岡県）、「阪本踊」（国選定／奈良県）、「古座（熊野地域）の扇踊り」（和歌山県）、「阿万の風流大踊小踊」（国指定／兵庫県）、「対馬の盆踊（特に、対馬厳原の盆踊）」（国選定／長崎県）などである。このうち「対馬厳原の盆踊」の阿連の盆踊は、特に琉球舞踊「古典女踊り」に近い。芸態の類似を指摘できるこれらの芸能は、江戸時代における廻船航路（①北前船②西廻り航路③菱垣・樽廻船④東廻り航路）などの主要商業ルート上に位置するのみならず、首里王府が江戸幕府に送った使節団（琉球使節）による「江戸上り」のルート、すなわち、沖縄から薩摩に渡り、次に長崎から平戸、下関を経て、瀬戸内海の海路で大阪に上陸、陸路により伏見（京都）から東海道で江戸に至るといったルート上に点在していることは極めて興味深い。（※芸態比較対照研究の詳細については別稿にまとめる）。

3) 民族芸術としての芸能の成立—琉球舞踊と綾子舞、秋保の田植踊—

同時に、綾子舞「小原木踊」（国指定）と「秋保の田植踊」（馬場・長袋・湯元／国指定・ユネスコ無形）とを比較対照した結果、次の新知見が明らかとなった。

すなわち、「小原木踊」は琉球舞踊「若衆特牛節」と非常に多くの共通点を有する一方、「若衆特牛節」とは全く異なる動きの型が含まれている。体感により区分した場合、「小原木踊」は大別2種の動きに分類できるのである。

では、若衆特牛節—すなわち、古歌舞伎踊とは異なる動きは何を示すのであろうか。その疑問を解決するのは、その型が「秋保の田植踊」と極めて類似した型であるという点である。この型と振りとは、秋保地方において

田植えを行う振りであると認められている。「綾子舞」を伝える新潟県柏崎女谷は、豊かな米どころである。つまり、綾子舞「小原木踊」は、琉球舞踊「若衆特牛節」と共通性を示す古歌舞伎踊の流れにあると同時に、その風土がもたらす「田植踊」の流れにも連なるのである。これはまさに、民俗芸能が民族芸術であるということ、すなわち民俗芸能が、その地域ならではの風光風土や特質のもとに独自の発展を遂げる「民族芸術」であることを如実に伝える事例と指摘できる。つまり、芸態（型）が極めて近い綾子舞「小原木踊」と琉球舞踊「若衆特牛節」とを対比すれば、芸脈を同一にする芸能が、地域ごとにいかなる特質—例えば衣裳や小道具の色など視覚的特徴や、振りの傾向や構成、楽曲や音調など—のもとに一つの演目を完成したか、という極めて重要、且つ根源的な、民族芸術学的特質が明らかになるのである。

なお、「秋保の田植踊」には弥十郎と称される少年たちが登場するが、沖縄のエイサーにもサナジャー（またはチョンダラー）と称される道化的役割が登場する。その芸脈は同一の系譜にあると推測できる。また従来、民俗芸能研究では、綾子舞の「囃子舞」について、男性が舞う足の運びが特異で興味深いと指摘されてきた。これまで看過されてきたものの、同様の足の運びは沖縄の民俗芸能に指摘できる。大和（内地）から沖縄に伝えられたとされる「宜野座の児太郎」（「宜野座の八月あしび」／国選定）である。さらに、「宜野座の児太郎」の型、すなわち一部の扇の扱いは、綾子舞や琉舞「若衆特牛節」に類似している。つまり、2）で結論付けた通り、沖縄を起点として芸態比較対照研究を広く行うことにより、遺された古歌舞伎踊の型を明らかにすることができるのである。

4) 琉球舞踊と古歌舞伎踊—幸若舞・能・歌舞伎と身体的理解

芸態比較対照研究を推し進めた結果、琉球舞踊が古歌舞伎踊の流れにあることを裏付ける次の新知見も明らかとなった。

すなわち、琉球舞踊と能・歌舞伎における型の類似である。能の足の運びが琉球舞踊に類似することは以前から指摘されてきた。型という観点から比較すれば、さらに「道成寺」などの演目、歌舞伎「寿式三番叟」などに、同一の振りや扇の扱いなど型の類似を見出すことができる。特にそれは、琉球舞踊のなかでも、琉球王国時代御冠船踊に成立が遡り祝儀舞踊に分類される「かぎやで風」「若衆特牛節」に顕著である。特定の琉球舞踊の演目が、具体的に古歌舞伎踊の型を組合せて形成されていった歴史的過程が浮かび上がるのである。

また、綾子舞の基本の構えと琉球舞踊の構えは、他の民俗芸能、すなわち、神楽などに比べ極めて近い形を取るが、同時に、この形は「幸若舞」（国指定、福岡県）の基本の構えに通じる。従来の芸能史研究が明らかにしたように、古歌舞伎踊とはそもそも、幸若舞や能楽・狂言という芸脈を吸収した芸能である。つまり、本研究が明らかとした「型」の共通性は、従来の文献研究を中心とした芸能史研究の成果を具体的に裏付ける結論となる。

助成者がかつて、宮城能鳳（重要無形文化財「組踊立方」保持者、重要無形文化財「琉球舞踊」総合認定保持者）から次のような指導を受けた。「もしもこの先も琉球舞踊を続けたいのであれば、（内地で）日舞（日本舞踊）を習ってはいけない。わたしのところにも日舞の関係者が琉舞を指導してほしいと訪ねてくるが、琉舞と日舞は身体の使い方が異なるから、琉舞をやっていたあなたが日舞をやると、型が崩れてしまう」（談 宮城能鳳）。芸態の比較対照研究では、身体による理解と「型」に基づく考察が極めて重要である。

5) 芸態比較対照研究が明らかにする踊衣裳の由来

以上1)～4)の結論は、琉球舞踊「踊衣裳」の考察においても同一の結論が導かれる。

背に長く布を垂らす綾子舞「小歌踊」のユライと琉球舞踊「古典女踊り」の紫長巾など、従来から指摘される琉球舞踊と綾子舞の踊衣裳の類似性がまず第一に存在すること、さらに、芸態比較対照研究から導かれた綾子舞と「秋保の田植踊」との関係性をふまえた上で琉球舞踊踊衣裳を捉え直す時、極めて示唆に富む興味深い事実が明らかとなる。それは、琉球紅型の古典柄であり、同時に、第2次世界大戦後の紅型復興期に紅型師 城間栄喜（1908年～1992年）が復元した紅型踊衣裳の図柄である。

栄喜が復元した踊衣裳、すなわち肩に雲形、裾模様は流水と菖蒲が配された「松に柳桜と藤と水辺花鳥文様紅型」は、①雲形 ②枝垂桜 ③裾の流水に菖蒲 という模様構成からなる。いずれも代表的な王国時代古典柄だが、特に③の裾模様は、琉球国王尚家伝来の紅型衣裳のほか踊衣裳の伝世品に数多くある。しかし、同踊衣裳の図柄の由来と生成過程はこれまで明らかではなかった。紅型資料の多くが第2次大戦地上戦で失われ、考察の鍵となる周辺国の染織意匠を比較したとき、個別の題材は日本の染織意匠と多く共通するものの、その模様構成は一部の江戸時代能装束をのぞき、小袖伝世品や小袖雛形本などの中にほとんど類例を見出だすことができなかったのである。

だが、助成者の過去の紅型踊衣裳調査をふまえた上で、本研究により国内民俗芸能調査を実施した結果、踊衣裳研究だけでは明らかにできなかった重要な課題、つまり、由来が不明であった紅型踊衣裳の図様・技法が、ほかでもなく、芸態（型）が琉球舞踊との繋がりを示す各地民俗芸能の踊衣裳に類似あるいは共通すると明らかとなった。沖縄の紅型踊衣裳と近似する図柄や技法を、日本本土の民俗芸能の踊衣裳に見出すことができるのである。

流水に菖蒲をあしらう図柄③は「秋保の田植踊」の、長袋と馬場の早乙女の踊衣裳に類似する（ただしその制作年代は、今後の研究課題である）。この流水に菖蒲模様の紅型踊衣裳には、琉球王国時代、琉球使節団の一員であった楽童子が着用したという伝承の残る踊衣裳（沖縄県立博物館・美術館）、名護市我部で村踊（組踊）に使用された踊衣裳（名護博物館）などがある。また、紅型踊衣裳を大きく特徴づける②の模様、肩から胸元に華やかに枝垂れる枝垂桜は「対馬 巖原の盆踊」（国選定、長崎県）が遺る対馬巖原の阿連や久根浜の盆踊踊衣裳にも見出せる。さらに技法的な観点から見ると、地芝居「黒森歌舞伎」（国指定、山形県）で用いられてきた踊衣裳は、廃藩置県後に首里の御殿から払い下げとなり国頭郡金武町に伝えられた「花色地震枝垂桜流水菖蒲朝顔花の丸模様紅型衣裳」（金武町指定文化財、屋嘉区）の特殊な技法、意匠表現に類似する。従来、紅型研究において残されてきた課題への解明の糸口を見出すことができるのである。

一方、本調査において、栄喜の紅型衣裳に連なる「雲形」模様の衣裳の描写が、六曲一隻の屏風に残されていることも明らかとなった。江戸時代17世紀に制作の「邸内遊楽図屏風」（大阪市立美術館）である。画面の邸内には扇を手に立つ女性の舞踊姿が描かれる。雲形模様の衣裳を着けた女性の形、すなわち「型」とは、まさに琉球舞踊「古典女踊り」の片足に重心を乗せて立つ「女立ち」と同一である。なお、これと同一の舞踊の型は「邸内遊楽図屏風」（サントリー美術館、江戸時代17世紀）、「舞踊図屏風」（重文、京都市・京都市美術館収蔵）などにも見出すことができる。栄喜が復元した雲形の踊衣裳図案は、歴史的な古歌舞伎踊の系譜の中に由来すると推測できるのである。

このように、従来の芸能史研究と染織・美術史研究において看過され、明らかとされずにきた紅型踊衣裳の解明においても、芸態比較対照研究を軸とする本研究の観点で、極めて重要な示唆を与えると指摘できるのである。芸態研究を根本に置き、踊衣裳、あるいは舞台幕の選択、思想的文脈との関連の中から考察することで、琉球舞踊と綾子舞における文化的・民族芸術学的特質が明らかになるといえる。

6) 遊楽図と芸態（型）

5) と関連して、次の新知見が明らかとなった。すなわち、芸態比較対照研究の過程で「型」を整理し、そのデータに基づき絵画資料を精査した結果、これまで絵画史や芸能史から指摘されていない重要な問題が明らかとなった。

江戸時代初期に数多く描かれた「遊楽図」は、阿国歌舞伎の流行を反映した初期歌舞伎図—「阿国歌舞伎図屏風」や「歌舞伎遊楽図屏風」など—を生んだ後、江戸時代前期、元和[1615～1624]・寛永[1624～1645]・寛文[1661～1673]年間の頃、屏風画中の群像表現から舞扇を持つ一人立美人図、男舞図へと展開する。こうした舞姿の一人立図は、やがて「寛文美人図」の隆盛の後、浮世絵へと系譜していくのだが、舞姿の一人立美人図には従来から、興味深い特徴が指摘されてきた。すなわち、「舞踊図屏風」（重文、京都市）や「舞踊図」（重要美術品、サントリー美術館）ほか紙本金地著色の屏風絵（六曲一隻）、「舞妓図」（大和文華館）など複数の伝世品に、同一のパターン化された身体表現が見いだされるのである（ただし小袖等の意匠表現は異なる）。その理由について

従来の絵画史研究は、美人風俗画の需要に応えるため、あるいは「尽くし」の趣向を背景として、一定の図様が定型化され複数点制作されたことと捉えてきた。複数制作のための形のパターン化、という理解である。

しかし、本研究により次の新知見が明らかとなった。舞姿の一人立美人図に描かれた踊り手のポーズが、助成者が調査を試みた民俗芸能の特定の「型」（芸態）とまったく一致したのである（ただし現時点ではすべての舞踊図ではない）。その一例が、「新島の大踊」（国指定、東京都新島村）、「湯元の田植踊」（「秋保の田植踊」、国指定・ユネスコ無形）、琉球舞踊（重要無形文化財）の「若衆特牛節」「かぎやで風」などである。

従って、次の3点を指摘できる。国内に伝承される小歌踊系の民俗芸能、古歌舞伎踊に系譜する民俗芸能の芸態と遊楽図を比較対照した結果、①近世初期遊楽図に描かれた舞姿は、特定の芸態、つまり「型」を記録し、舞踊（演目）において重要な「一瞬」を画にとどめたものと考えられる。また、②近世初期遊楽図が一人立舞踊図（舞妓図）へと展開した背景として、芸能における芸態（型）の記録という意図が存在した可能性を指摘できる。恐らく、舞踊図を鑑賞する際に江戸時代の人々は、画面に踊り手の「型を決めた姿」を見出していたのである。これは後の浮世絵に描かれた歌舞伎の「見得」にも通じる。役者絵などの浮世絵表現に系譜する萌芽を「型」の表現に指摘できるのである。③そして①②の結論は、琉球舞踊と綾子舞ほか国内民俗芸能などとの芸態比較対照研究から導かれた結論に一致する。すなわち、琉球舞踊の「若衆特牛節」「かぎやで風」が古歌舞伎踊の系譜にあるとの結論¹⁾である。

7) 新たな研究課題

上記研究を推し進めるなか、次の新知見と新たな課題が明らかとなった。すなわち、八重山地方に伝わる八重山舞踊には、八重山舞踊勤王流ほか沖縄本島で琉球王国時代に完成された御冠船踊の型が継承されるが、この八重山地方に伝わる舞踊の型には、国内各地の民俗芸能の型との共通性を見出すことができる。すなわち、沖縄本島の周辺地域、特に先島諸島に伝わる舞踊をさらに詳細に検討することで、琉球芸能と古歌舞伎踊の関係性、すなわち、琉球舞踊の生成過程と様相が、より明らかになると考えられるのである。

今後の展望および課題

以上のように、本研究で行った芸態比較対照研究により、先達の文献研究の成果が具体的に裏付けられる結果が得られた。さらに、沖縄の芸能を起点として芸能を捉え直すことで、失われた古歌舞伎踊の実相、古歌舞伎踊の実像がより明らかとなる可能性を指摘できるという結論が明らかとなった。これは先学の指摘、「人形芝居の調べに夢中になっていたころ、沖縄首里の郊外の行者村（アンニヤムラ）に、中世日本の原始人形芝居の形式が遺存しているらしいという諸家の報告に接したのが、わたくしの沖縄藝能に着目しはじめた最初であった。それからもとの有楽座で沖縄の民俗舞踊を見學した時にも、なるほど「日本藝能」のふるさと」だなど感じた部分があった」（※傍線筆者）。（河竹繁俊「沖縄の藝能」『沖縄の古謡と舞踊』p.1）という記述に矛盾しない。また、芸態比較対照研究の結果を絵画史・染織研究に反映すれば、琉球舞踊や古歌舞伎踊をめぐる民族芸術学的理解が、芸能と美術の両面から重層的に示される。

今後、八重山地方など沖縄の先島諸島の芸態採取を中心に、奄美地方をも視野に入れた琉球舞踊芸態調査を推し進め、国内各地の芸態との比較対照を行うことで、琉舞を初めとする各地の芸能の生成過程がより具体的に明らかになると思われる。引き続き調査研究に取り組んで参りたい。



図 1. 琉球舞踊 若衆踊「若衆特牛節」(※首里城公園伝統芸能公演「舞への誘い」映像から撮影)
 扇子の左端を持ち身体を舞台下手に向けたうえで、扇を前方に弧を描くようにかざすという図 1 の振り
 は、従来、他の琉舞の演目には見られない珍しい扇の扱いと指摘されてきた。



図 2. 綾子舞「小原木踊」(下野) 新潟県柏崎市 (※綾子舞現地公開公演の映像から撮影)
 綾子舞の小歌踊で伝承される「投げ扇」の型。扇の地紙の左端をつまんで舞台の下手に向き、身体の前で
 大きく弧を描いて客席側に投げ出す動作。図 1 と同一の型である。この「投げ扇」の型は、同小歌踊「因
 幡踊」(高原田)ほかにも見出せる。



図3. 琉球舞踊 若衆踊「若衆特牛節」

扇子を水平に持ち前方にかざす動作。このあと右手で柄を持ち図1の振りに移る。この扇の扱いは、綾子舞「小原木踊」の型「かざり扇」に一致するほか、「阿万の風流大踊小踊」ほか各地芸能の型にも類型を見出すことができる。

図3・図5【撮影協力】舞踊指導：宮城能鳳（重要無形文化財「組踊立方」保持者／人間国宝、重要無形文化財「琉球舞踊」総合認定保持者）、舞踊：新垣悟（宮城本流鳳の會教師）、撮影：大城洋平



図4. 綾子舞「小原木踊」（下野）新潟県柏崎市（※綾子舞現地公開公演の映像から撮影）

綾子舞の型「かざり扇」。扇の扱いは図3と同一である。このほか綾子舞「小歌踊」における「打ち込み扇」「決まり扇」「立て扇」「大巻扇」などの型が「若衆特牛節」と一致する。

かつて本田が指摘した綾子舞と沖縄の宮廷舞踊との共通性とは、両舞踊ともに演目が三部構成（「出羽・本歌（沖縄では中踊り）・入羽」）をとるという形式上の一致についての指摘であったが、本研究により舞踊構成のみならず重要な「型」の一致が確認された。



図 5. 琉球舞踊 若衆踊「若衆特牛節」

手のひらを舞台前方に向けて扇の柄を掴み、扇がわずかに視界の中に収まる位置で肩と水平に保ち前方に歩む。同様の扇の扱いは、琉舞「上り口説」などのほか、綾子舞「小原木踊」や「対馬巖原の盆踊」ほかに指摘できる。なお「小原木踊」の型は、扇の位置がやや下がり、扇子の先を肩先に少しのせて「大巻扇」と称する。



図 6. 琉球舞踊 二才踊「上り口説」

「若衆特牛節」や「かぎやで風」にみえる図 5 の型は、二本扇踊りとなる二才踊「上り口説」でより複雑な型に発展する。

「上り口説」にはこのほか、これまで綾子舞に特徴的な足の運びと研究者に指摘されてきた足さばき、すなわち腰を落として足を綾のように交差させる足の運びなども指摘できる。

図 6・図 7【撮影協力】 舞踊指導：宮城能鳳（重要無形文化財「組踊立方」保持者／人間国宝、重要無形文化財「琉球舞踊」総合認定保持者）、舞踊：田口博章（安座間本流 宮扇恵美の会教師）、撮影：大城洋平



図7. 琉球舞踊 二才踊「上り口説」

「上り口説」では、身体の前方後方に構えた扇が垂直に保たれるよう修練を繰り返す。類似した扇の扱いと振りが「坂本踊」や「古座（熊野地域）の扇踊り」などに残されている。

(完)

発表論文・学会発表

- 1) 学会発表「遊楽図と芸態—琉球舞踊・古歌舞伎踊の系譜考—」2020年6月14日（予定）第57回藝能史研究会大会、於 龍谷大学
- 2) 学会発表「絵画資料にみる「芸態」の記録—近世初期遊楽図と琉球舞踊・古歌舞伎踊—」2020年7月4日（予定）民俗芸能学会第180回研究例会、於 早稲田大学演劇博物館
- 3) なお、成果物として、芸態比較対照研究による「芸態」と「型」の記録化を進めている。これらは後日、研究論文等として公表するとともに、各地の伝承に役立つ形での公開を予定している。

引用文献

- 1) 河竹繁俊「沖縄の藝能」（『沖縄の古謡と舞踊』所収、本田安次編集、早稲田大学演劇博物館内民俗芸能の會発行）1951年
- 2) 郡司正勝『かぶき—様式と伝承—』寧楽書房、1954年（改訂版 ちくま学芸文庫、2005年）
- 3) 郡司正勝『かぶきの発想』弘文堂、1959年
- 4) 本田安次『図録 日本の民俗芸能』朝日新聞社、1960年
- 5) 本田安次『南島探訪記—沖縄の信仰と藝能—』南善堂書店、1962年
- 6) 服部幸雄『歌舞伎成立の研究』風間書房、1968年
- 7) 服部幸雄「歌舞伎—構造の形成—」（『日本の古典芸能 第八巻 歌舞伎』所収）平凡社、1971年
- 8) 本田安次『日本の伝統芸能』錦正社、1990年（※本田安次『わたしのアルバム 伝統芸能の系譜』1986年普及版）
- 9) 本田安次『沖縄の祭りと芸能』第一書房 南島文化叢書、1991年（*助成者は、所属する沖縄藝能史研究会において當間一郎会長から、本田の思い出や沖縄での本田の芸能調査についてご指導ご教示をいただいた。）
- 10) 本田安次『本田安次著作集～日本の伝統芸能 第十巻 風流 I』錦正社、1993年

- 11) 拙論「紅型の踊衣裳—琉球芸能の場における琉球王国末期から現代の色と形」『民族藝術 vol.27』民族藝術学会、2011年（※単著『琉球紅型』第6章所収、株式会社ADP、2012年）
- 12) 拙論 2011年度「美術に関する調査研究の助成」研究論文「琉球王国時代から現代に於ける沖縄（琉球）の芸能祭祀と紅型：紅型の衣裳と幕について」『鹿島美術財団年報 29号別冊』公益財団法人鹿島美術財団、2012年
- 13) 須藤武子「富治さんの時代」（『重要無形文化財国指定40周年記念誌 綾子舞』所収、綾子舞国指定40周年記念誌 綾子舞国指定40周年記念事業実行委員会編集・発行）2016年
- 14) 助成者学会発表 2017年12月2日「綾子舞と琉球舞踊——芸態比較研究による小歌踊と二才踊・若衆踊」、❖発表要旨掲載：『平成29年度民俗芸能学会権葉大会 大会プログラム・研究発表要旨』民俗芸能学会権葉大会実行委員会、2017年、❖発表概要掲載：『民俗芸能学会会報 第99号』民俗芸能学会、2017年12月26日発行